

英国立公文書館の日本・東南アジア関係史料（文献解題36）

清水 元編
東京 アジア経済研究所発行 1992.3
190p 21cm 2266円

『記録と史料』の誌上で本書を紹介する意味は三つあるだろう。第一は、本書がパブリック・レコード・オフィス（PRO、英国立公文書館）の文書館活動と所蔵史料の一端を知るための恰好のガイドブックになっているということ。第二は、本書が「テーマ別史料所在目録」の一つのモデルを提供しているということ。第三は、英国外務省公文書の作成と流れに関する史料学的な解題が含まれている、ということである。

まず第一の点。PROは、ワシントンのナ

ショナル・アーカイブズ(米国立文書館)とならぶ海外における日本関係史料の宝庫であり、佐藤元英「Public Record Office所蔵イギリス外務省の日本関係文書について」(『外交史料館報』第1号、1988年3月)や『日本関係イギリス政府文書目録』(『横浜市立大学紀要』人文科学編輯シリーズ第2号、1988年3月)などによって、日本関係史料の概要についてはかなり知られてきている。本書はこれに加えて、一般的な「PROの利用の仕方」をはじめ、植民地省・外務省・商務省・海軍省・インドビルマ省など東南アジアに関係する英国各省の文書体系にも触れており、アーキビスト的な関心からPROの史料管理システムの一部をのぞけるという点で興味深いのである(決して十分ではない。念のため)。次に第二の点。本書は、PRO所蔵のイギリス政府文書のうち、日本の東南アジア進出に関係する史料についてまとめた手引き書でもある。文書館学上の分類に従えば、「テーマ別史料所在目録」select guideといわれるものの一種にあたるだろう。編者はかならずしもアーキビストとして本書をまとめたわけではないと思われるので、そのように分類されることは心外かも知れないが、私は今後、アーキビストが力を入れるべきことのひとつにselect guideの開発と編集ということがあると考えているので、本書はそういう意味で参考になると思う。最後に第3の点については、日本・東南アジア関係に関する領事現地報告という具体的事例を通して英国外務省公文書の流れを説明している点が興味深い。

いちおう本書の構成を説明しておこう。本書は大きく二部に分かれる。第一部は、先述の各省庁文書の中のどういった部類の文書群(PROではクラスclassと呼んで個別の文書群記号を付けている)に日本の東南アジア進出に関する史料があるかという概説的な部分である。ページ数にして本書の約四分の一である。第二部は史料目録で本書の約四分の三、140頁を占める。もちろんPRO史料の全体を網羅しているわけではない。それどころか外

務省文書の一つクラスであるFO371(外務省文書Foreign Officeの371号文書群という意味)のみに限られている。とはいえ、このFO371(General Correspondence:Politicalというタイトルがつけられている)は世界各地の在外公館や出先機関と本国外務省との往復文書が収められており、総数11万点以上という外務省の最大文書群の一つである。したがって、これを見ただけでもかなりのことはわかる。

戦後50年を機に日本・東南アジア関係についての歴史認識のあり方が取れている現在、「日本の東南アジア進出」というテーマに絞って、完全ではないけれどもPROが所蔵する史料の利用案内を試みた本書は、いろいろな意味で有益な文献だといえるだろう。

安藤正人・国立史料館